

創造における神の知

——トマス・アクィナス De verit. Q. 2, 3——

山本 耕平

I

トマスによれば神に二つの「発出」(processio)が認められる。一つは「神の内への発出」(processio ad intra)であり、他は「神の外への発出」(processio ad extra)である。前者に於いては「一」なる神のうちに「根源」(principium)としての「御父」(Pater)から「御言」(Verbum)である「御子」(Filius)並びに「御父」と「御子」から「愛」(Amor)である「聖霊」(Spiritus Sanctus)の発出が含意される。⁽²⁾後者に於いては神から神でないもの、即ち被造的世界の発出が含意される。⁽³⁾何故、神にこのような発出が認められるであろうか。トマスの最も根源的な神概念はその「本質」(essentia)が「存在」(esse)であるところの「それ自体で自存する存在そのもの」(ipsum esse per se subsistens)⁽⁵⁾である。神の「存在」と「本質」との間にはいかなる実在的区別も見い出されず、「存在」そのものがそれ自体で自存しているもの、それが神に他ならない。そして、トマスは「存在」を最も根源的な「現実態」(actus)⁽⁶⁾として把える。それ故、存在そのものなる神はいかなる「可能態性」(potentialitas)をも含まぬ「純粹現実態」(actus purus)⁽⁷⁾である。更にトマスは現実態を「完全性」(perfectio)⁽⁸⁾として理解する。ものは「可能態」(potentia)にある限りにおいて不完全であり、現実態にある限りにおいて完全である。それ故、ものは存在する限りにおいて現実態にあり、現実態にある限りにおいて完全である。従って、あらゆる完全性が究極的には「存在」の完全性⁽⁹⁾として理解される。トマスは神を「自存する存在そのもの」、即ち存在の純粹現実態として特徴づけ、そのことによって神のうちに存在のあ

らゆる完全性と豊かさを理解する⁽¹⁰⁾。しかし、トマスは「現実態」を単に「完全性」として理解するのみならず、更に「はたらきの根源」(principium actionis)⁽¹¹⁾として把える。ものは現実態にあり、完全である限りにおいてはたらく⁽¹²⁾。「はたらく」(agere)ということは「はたらくもの」(agens)がそれによって現実態にあるところのもの、即ち自己の存在の完全性を何らかの仕方⁽¹³⁾で他に伝える(communicareする)ことである。それ故、純粹現実態である神は最高度に完全であり、はたらきの根源としての性格に最高度に適合する。「一」にして最も完全な神に何故「内への発出」と「外への発出」が認められるかということの究極的な存在論的根拠をトマスは「本質」が「存在」そのものである神の「純粹現実性」に求め⁽¹⁵⁾ていると思われる。

しかし、これは最も根源的な規定である。最高の完全性を意味する純粹現実態は知性的本性(natura intellectualis)そのものである。知性的本性に固有なはたらきは知性と意志のはたらきである⁽¹⁶⁾。それ故、神の「内への発出」と「外への発出」は神の知性と意志のはたらきに即して生ずる。しかし、両者の発出に於いて神の知性と意志は根本的に異なつたはたらき方をする。「内への発出」に於いて「御言」と「聖霊」は神の知性と意志のはたらきに即して本性的(naturaliter)に「ペルソナ」(persona)⁽¹⁷⁾として発出する。ペルソナの発出において神の知性と意志は原因性を伴っていない。各々のペルソナは「自存するもの」(subsistens)⁽¹⁸⁾であるが、しかし同じ一つの本質と存在を共有する一なる神である⁽¹⁹⁾。ペルソナはただ発出の「秩序」(ordo)の関係(relatio)によってのみ區別される⁽²⁰⁾。それ故、神のペルソナ相互の間には原因と結果の関係はない。「御子」の発出は generatio⁽²²⁾、「聖霊」の発出は spiratio⁽²³⁾と言われる。これに対して「外への発出」に於いては、神でないもの、即ち被造的世界が神の外に神の結果(effectus Dei)として神の知性と意志の限定のもとに発出する⁽²⁴⁾。神の知性と意志を原因として神から被造的世界の発出するこ

とがCreatio〈創造〉である。ところで神の知性と意志、並びにそのはたらきは純粹現実態である神において神の根源的な現実態、即ち神の「存在のはたらき」(actus essendi)から実在的に区別されない。それ故、世界は神が世界を知性認識し、意志することによって創造される。⁽²⁵⁾

しかし、両者の発出は内的に深く関連している。神の「内への発出」が「外への発出」の原理となる。即ち神が自己自身を永遠的に知性認識し、意志(愛)することによって本性的な仕方⁽²⁶⁾で永遠的に神の内に発出する神の「言」と「愛」が世界創造の原理となる。神が世界を創造することは「御父」が「御言」である「御子」と「愛」である「聖霊」を通して世界を無から造り出すことに他ならない。創造は神の三つのペルソナの協働の業である。⁽²⁷⁾しかし、以下においては創造を神の知、神のアイデアとの関連において考察する。創造と神のペルソナ、特に「神の言」と⁽²⁸⁾の関係については後の課題にしたいと思う。

II

トマスは神が世界を作家(artifex)が作品を制作する如く創造することを繰り返して述べている。⁽²⁹⁾両者の類似はそれらの知によって世界あるいは作品を自己の外に自己の結果として造り出すという点にある。作家は作品を偶然から(a casu)、あるいは自己の自然本性(natura)から造るのではない。作家の作家たる限りにおける働きは真に知性的であり、作家は自らの造り出さんとする作品の形相を現実の制作に先立って自らの精神のうちにアイデアとして抱いている。⁽³⁰⁾制作が独創的であればあるほど作品の形相は作家の精神のうちにアイデアとして明瞭な「形」をとって現在するのであろう。作家はかかるアイデアを「範型」(exemplar)として質料、素材に形相を刻印する。それ故、アイデアは作品の範型であり、作品はアイデアを範型として形相づけられたものである。アイデアを範型として形相づけられている限りにおいて作品はアイデアの類似(simili-

todo) である。⁽³¹⁾制作においては質料は自然(natura)によって前提されているのであるから、作品はその形相において制作家のアイデアの類似である。⁽³²⁾

他方、同様に世界はカオスから偶然的に生成するのではない。また神から非知性的、非意志的に流出(emanari)するものでもない。更にまた神が世界を生む(generareする)のもない。世界は神の作品であり、その固有の存在に先立って神に認識されており、神の精神のうちに世界を構成する諸々の諸事物の範型的形相(forma exemplaris)がアイデアとして抱かれており、それらアイデアに象って、アイデアの類似のもとに造られる。⁽³³⁾それ故、世界を創造する原因としての神の知は神の精神の内に先在するアイデアに他ならない。⁽³⁴⁾しかし、創造は世界の全存在(totum ens)を無から(ex nihilo)造り出すことであるから、アイデアは世界の全存在を造り出すアイデアである。従って世界の全存在がアイデアの類似でなければならぬ。

それでは未だ自己の固有の存在、即ち時間的、歴史的世界のうちに現実に存在しない諸事物がいかんにして神に認識され、またそれら諸事物のアイデアが神のうちに、いかなる仕方でも存在するのであろうか。

トマスによればアイデアは形相(forma)である。しかし、すべての形相がアイデアであるわけではない。「事物から離在するその事物の形相」⁽³⁶⁾(forma separata ab eo cuius est forma)、あるいは「事物の外に存在するその事物の形相」⁽³⁷⁾(forma aliarum rerum praeter ipsas res existentes)⁽³⁸⁾がアイデアと言われる。このアイデアの規定に関する限り、アイデアとしての形相は必ずしも精神、知性のうちに存する必要はない。しかし、それによって世界が創造されるアイデアは神の知性のうちにのみ存在しなければならない。⁽³⁹⁾何となれば「第一有」⁽⁴⁰⁾(ens primum)、「第一原因」⁽⁴¹⁾(causa prima)である神の外に、創造されざる、従って原因されざるいかなるものをも措定することが出来ないからである。創造の原理として

でのアイデアは神の知性、神の精神のうちにのみ存在する。

Ⅲ

では「事物から離在するその事物の形相」としてのアイデアは神の知性のうちにどのような仕方で存在するのであろうか。知性のうちに存する形相は二様の在り方をする。一つは「知性認識のはたらきの根源」(principium actus intelligendi)としての形相であり、他は「知性認識のはたらきの終極」(terminus actus intelligendi)としての形相である。⁽⁴²⁾

根源としての形相は知性を形相化し、知性認識のはたらきを現実化するものであり、それは「認識されるもの」(res intellecta)の「類似」(similitudo)であり、トマスが可知的形象(species intelligibilis)と呼ぶ形相である。⁽⁴³⁾ トマスによれば認識は基本的に「認識するもの」(intelligens)と「認識されるもの」(res intellecta)との合一(unio)、あるいは類同化(assimilatio)にある。⁽⁴⁴⁾ しかし、それは「認識するもの」と「認識されるもの」とが本性的(naturaliter)に合一することによってではなく、「認識されるもの」の類似によってなされる。⁽⁴⁵⁾ 「認識されるもの」の類似が「認識するもの」の知性を形相化することによって両者は合一する。それ故、「認識されるもの」の類似、即ち可知的形象は認識の medium としての形相である。可知的形象が認識の medium であるためには二つのことを必要とする。まず第一にそれは「非質料的な存在」(esse immaterialiale)⁽⁴⁶⁾ でなければならない。知性が認識能力を有するのは知性の「非質料性」(immaterialitas)⁽⁴⁷⁾ にある。従って認識が現実化されるためには知性が非質料的(immaterialiter)に形相化されなければならない。それ故、「認識されるもの」の類似である可知的形象は「認識されるもの」の非質料的な類似でなければならない。また、あるいはそれ故に「認識されるもの」の類似はその本性(natura)の合致にもとづく類似ではなく、「認識されるもの」を表現(repraesentare)⁽⁴⁸⁾ する限りにおける類似である。「類似」(similitudo)

は二つのもの間に見い出される関係であるが、それは二様の在り方を
 する。一つは本性(natura)そのものの合致にもとづく類似である。⁽⁴⁹⁾たと
 えば「火」(ignis)が有する「熱」(calor)と火によって「熱くされたもの」
 (res calefacta)との間には「本性の存在」(esse naturae)にもとづく類
 似がある。「認識するもの」と「認識されるもの」との間にはこのような
 類似は必要ではない。他方、或るものは自己の固有の本性を有しながら、
 同時に他のものを表現しており、その限りにおいて「表現の類似」⁽⁵⁰⁾(sim-
 ilitudo repraesentationis)が見い出される。知性を形相化する「認識さ
 れるもの」の類似はそれ自体、非質料的な本性と存在を有しながら、「質
 料的なもの」をも表現するものである。それ故、知性を形相化する prin-
 cipiumあるいは知性認識を現実化する mediumとしての形相は「認識され
 るもの」(res intellecta)を表現する非質料的な類似である。

他方、認識の終極としての形相は形相化された知性、即ち現実化され
 た知性認識のはたらきによって知性のうちに考え出された(excogitata
 された)、いわば産出された(effectaされた)形相である。この形相は知
 性認識のはたらきが現実化されると同時に、その終極(terminus)として
 知性のうちに表出(experimere)される形相である。しかし、この形相は単
 に知性のうちに表出され、うみ出された形相であるばかりでなく「認識
 されたもの」⁽⁵¹⁾(intellectum)として表出される。「認識されたもの」(intell-
 ectum)である限りにおいて、それは思惟の対象となる。⁽⁵²⁾しかし、言う
 までもなく知性の外に存在する res intellecta としての対象ではなく「認
 識された理念」(ratio intellecta)としての対象である。理念(ratio)のう
 ちに res intellecta が表現されている限りにおいて理念が思惟の対象と
 しての性格を有する。

知性のうちに以上二つの形相を見い出すことが出来る。知性のうちに
 これら二つの形相措定することは知性認識の二つの側面を指摘すること
 である。一つは知性認識が認識主体と認識対象との合一、あるいは類同

化にあり、それは認識対象を表現している非質料的な類似によって知性が形相化され、現実化されることによる。他方、現実化された知性認識は必然的にその終極、あるいは完成として認識対象の認識された理念を認識主体のうちに表出 (exprimere) する。これは認識主体が認識対象を自己自身のうちに理念として対象化することである。

IV

神の知性のうちにも、この二つの形相を考えることが出来る。神の知性の「根源的な対象」(objectum principale) は神自身、即ち神の本質である。⁽⁵³⁾ 神の知性認識は自己の本質の認識であり、従って神の知性を形相化し、現実化する形相的根源は神の本質の類似である。

しかるに神はその本質において存在の純粹現実態である。それ故、神の知性もまた純粹現実態にある。⁽⁵⁴⁾ 従って神の知性にあってはその実体そのものが知性認識のはたらきそのものである。神の知性は可知的形象によって可能態から現実態へと形相化され、現実化され、完成されるのではなく、神の知性は完成そのものである。⁽⁵⁵⁾ それ故、神の知性は、知性認識のはたらきそのものであることによって可知的形象そのものでもある。⁽⁵⁶⁾ また神において可知的形象は神の本質そのものでなければならない。神の本質はそれ自体において完全に非質料的であり、またそれ自体によって自己を完全に表現しているからである。それ故、神は自己の本質をそれから区別される何らかの類似によって認識するのではなく、自己の本質そのものによって認識する。神の知性認識の形相的根源、即ち可知的形象は神の本質そのものである。⁽⁵⁷⁾ 神によって認識されるすべてのものが神の本質のうちに単純な仕方では表現されているのである。従って神の本質は本質そのものによって認識された本質であり、神の本質は自己認識そのものであって、神のうちに「認識する自己」と「認識される自己」とのいかなる実在的区別もありえない。「神が自己自身を認識する」とい

う時に含意される関係は実在的ではなく、神の知性は知性そのものが自らの知性認識の対象である。⁽⁵⁸⁾従って神において認識する知性と認識される神の本質とそれによって認識する認識の principium あるいは medium としての可知的形象はすべて一にして単純な神の本質そのものである。⁽⁵⁹⁾

しかし、認識の終極としての形相、即ち神の知性認識のはたらきによって神の知性のうちに「認識されたもの」(intellectum)として表出される形相は多数措定される。何となれば神の本質は一にして単純であるが、しかし、その一性並びに単純性は無限の完全性を内に含むそれである。それ故、神は自己の本質を端的に自己の本質として認識するのみならず、自己の本質の無限の完全性が有限な諸事物によって不完全に、即ち限定された proportio を伴って欠落的な仕方で (deficienter) に分有されうるもの (participabile) としても認識する。⁽⁶⁰⁾無限の完全性は有限な諸事物によって無限の仕方で分有され、模倣されることが可能である。それ故、同じ一にして単純な神の本質が様々な限定された proportiones を伴って分有されうるものとして認識されることによって「認識された理念」としての形相は神の知性のうちに無限に多数見い出される。この認識された理念が、それら諸事物のイデアである。それ故、諸事物のイデアは神の知性のうちに無限に多数措定される。⁽⁶¹⁾しかし、イデアの多は神の知性の単一性 (uniformitas)、神の本質の単純性 (simplicitas) これらいずれを害うこともない。知性の単一性は知性を形相化する可知的形象、即ちはたらきの形相的根源の単一性による。しかし、イデアは知性を形相化する形象ではなく、「認識されたもの」として知性のうちに存在する。それ故、イデアの多によって知性認識の多が措定されるわけではない。⁽⁶²⁾神のうちには神の本質による一なる直観的な認識が在るのみであり、その一なる直観的な認識によっていかなる推論 (discursus) を伴うことなく、多数のイデアが認識内容の多として措定される。またイデアは諸事物の神の本質に対する proportiones が cointelligere された時の神の本質その

ものであって実在的にはイデアは神の本質から区別されない。諸事物の神の本質に対する認識された関係の多によってイデアの多が措定されるのである。⁽⁶³⁾

V

それ故、イデアには二つの様態 (modus)が見い出される。一つはイデアの認識内容あるいはイデアの対象的な側面である。イデアは常に「何か或るもの」(aliquid)のイデアである。⁽⁶⁴⁾それはイデアが「或るもの」を表現(repraesentare)しているからである。また、その表現の類似(similitudo repraesentationis)によって、その表現の類似の様態に従って⁽⁶⁵⁾「或るもの」はイデアにおいて認識されている。それ故、イデアとイデアにおいて表現され、認識されているものとの間に本性の合致にもとづく類似性があるわけではない。⁽⁶⁶⁾イデアは「或るもの」を表現している限りにおいてその「或るもの」のイデアと言われる。それ故、イデアには「或るもの」を表現し、「或るもの」のイデアである限りのイデアが受け⁽⁶⁷⁾とっている(patitしている)様態が見い出される。

他方、イデアには自らが表現している「或るもの」の様態から区別されるイデアそのものの様態、即ち、イデアそのものの本性と存在が考えられる。これはイデアがそれによって存在する様態であり、イデアはかかる様態、即ち自己の本性と存在を自らがそのうちに存在している神の知性から受けとる。トマスはイデアの以上二つの様態を創造と関係づけて繰り返し強調している。何となれば事物がイデアによって創造されると言う時、事物はイデアそのものの様態によって創造されるのではなく、イデアにおいて表現されている様態に従って創造されるからである。⁽⁶⁹⁾それ故、イデアそのものの本性と存在は神の知性、神の本質と同じ一つの⁽⁷⁰⁾ものである。従ってイデアそのものは神の本質と共に非質料的であり、⁽⁷¹⁾単純であり、⁽⁷²⁾可知的であり、⁽⁷³⁾現実態にあり、⁽⁷⁴⁾永遠であり、⁽⁷⁵⁾非可変的、⁽⁷⁶⁾必然的等である。しかし、イデアにおいて表現され、認識されているもの

は神の本質を不完全に、欠落的に分有するものであるから、質料的であり、複合物であり、可感的であり、可能態にあり、時間的であり、可変的、偶有的等でありうる。それ故、トマスは神の知性のうちに諸事物の種(species)⁽⁷⁷⁾、附帯性(accidentia)⁽⁷⁸⁾のイデアのみならず、第一質料(materia prima)⁽⁷⁹⁾、個物(singularia)⁽⁸⁰⁾のイデアを指定する。事物はその全体において res tota が神の本質の何らかの類似を分有するものとして表現されている。それ故、事物の全体がイデアにおいて認識され、従って事物を構成する種、附帯性、第一質料、そして個物のイデアが指定されるのである。⁽⁸¹⁾

トマスは第一質料、並びに個物のイデアを指定することの特異性を十分に意識している。第一質料はそれ自体形相を持たないimformisなものである。しかし、それはいかなる「存在」(esse)をも所有しない「無」(mihil)ではなく、何らかの存在を分有するものである。第一質料によって分有される存在がいかに「弱い存在」(debile esse)であろうとも、存在を分有する限り第一質料は神の存在の類似を保持するものである。⁽⁸²⁾ 第一質料が神の類似を分有する限り、第一質料の非質料的な類似が神のうちに指定され、その類似のうちに第一質料が表現され、認識されている。それ故、第一質料のイデアが神のうちに指定されるのである。⁽⁸³⁾

またトマスによれば事物の個性性(singularitas)⁽⁸⁴⁾の原理は質料である。事物は形相によってその種が決定されるが、事物が個体化されるのは質料によってである。形相はそれ自体普遍的(universale)⁽⁸⁵⁾なものであり、質料によって個体化された形相が個物である。それ故、事物はその形相の特質(ratio)によってはその事物の個性性は認識されない。事物の個性性の認識は事物の質料の認識によって為される。質料の認識は質料の類似によって為される。質料の類似は存在(esse)⁽⁸⁶⁾においては質料から分離されているが、表現(repraesentatio)⁽⁸⁷⁾に従っては質料から分離されていない。それ故、種のイデアのみならず、質料のイデアを指定し、そのこ

とによって個物が認識され、個物のアイデアが措定されるのである。

VI

トマスによればこれらのアイデアは神の実践的認識(cognitio practica)と思弁的認識(cognitio speculativa)に属する。⁽⁹¹⁾ 実践的認識は創造のはたらしに秩序づけられ、あるいは秩序づけられうる認識である。他方、思弁的認識は、はたらしに秩序づけられることなく、純粹に真理認識を目的とする認識である。それ故、創造の原因としてのアイデア、即ちそれによって諸事物が創造され、形成される範型的形相としてのアイデアは神の実践的認識に属するアイデアである。創造において存在へと産出されるものは自存する事物の全存在(totum ens)、即ち形相によって種が決定され、質料によって個体化され、個的附帯性によって限定された個物の全体である。それ故、事物を存在へと産出する範型的形相としてのアイデアは究極的には個物のアイデアである。⁽⁹²⁾ 形相、質料、附帯性を形成するアイデアは複合物としての個物のアイデアのうちに含まれる。しかし、存在において一であるものを分離し、区別して考察する思弁的認識のうちに、種、附帯性、質料のアイデアを、それ自体区別された純粋な理念として措定することは可能である。⁽⁹³⁾ しかし、今問題にしているのは世界の創造の原因としてのアイデアである。トマスの、従ってまたキリスト教的創造論に特徴的であることは個物のアイデアを神のうちに措定することである。それは創造が単に事物の種(species)を形成することではなく、個物の創造であることによる。創造されるものは自存する個物の全体である。そして個物のアイデアはそれによって個物が創造される個物の創造の原理であると共に、個物がそれにおいて認識される個物の認識の原理でもある。それ故、神の摂理(providentia)は個物にまで及ぶのであり、個物が神の摂理のもとにあり、⁽⁹⁴⁾ 個物の創造は個物の救済と深くかかわっている。個物のアイデアを措定することによって創造論が救済論の意味を有する。

最後に、神の実践的認識は「現実的に実践的な認識」(cognitio practica actus)と「能力態的に実践的な認識」(cognitio practica virtute)に⁽⁹⁵⁾区別される。そのことによってアイデアが現実的に実践的なアイデアと能力態的に実践的なアイデアに区別される。実践的アイデアにおいて事物は存在へと産出されうる限りにおいて、即ち個物として認識されている。そして、そのアイデアによって個物が何らかの時に、即ち過去、現在、未来の何らかの時に創造される時、そのアイデアは現実的に実践的である。アイデアにおいて認識されている事物は何らかの時に存在し始めるものとして表現され、その表現されている様態に従って創造される。他方、アイデアそのものは永遠であり、自らの永遠性のうちに全時間を同時的に含んでいる。それ故、時間的、歴史的世界の何らかの時に存在する事物に対して実践的アイデアはことごとく現実的に実践的である。⁽⁹⁶⁾それ故、時間的、歴史的世界のうちにあらわれてくる諸事物の範型的並びに産出的根源、即ち創造の原理は神の現実的に実践的な認識に属するアイデアである。

しかし、神の実践的認識のすべてが現実的であるわけではなく、能力態的に実践的な認識が措定される。そのことによって実践的ではあるが、しかし現実的ではなく、永遠に能力態的であるアイデアが神のうちに措定される。これらのアイデアにおいて、事物は存在へと産出されうる限りにおいて認識されており、その限りにおいて実践的であるが、しかしそれらのアイデアによって事物は過去、現在、未来のいかなる時にも創造されることがない。それ故、これらのアイデアは決して創造の原理、原因とならないアイデアである。しかし、トマスは「現在存在せず、過去に存在しなかったし、未来にも存在しないであろうもの」(ea quae nec sunt, nec erunt, nec fuerunt)のアイデアを⁽⁹⁷⁾創造論との関係において強調している。これらのアイデアにおいて認識されている事物は決して時間的、歴史的世界にあらわれず、その事物固有の存在を持たないものである。その⁽⁹⁸⁾限りにおいてかかる事物は「非有」(non ens)である。しかし、「無」

(nihil)ではない。トマスにおいて「無」は徹底的に否定的な概念であり、⁽⁹⁹⁾いかなる実在性をも有していない。「現在存在せず、過去に存在しなかったし、未来においても存在しないであろうもの」は「無」ではなく、神の能力態的に実践的なアイデアのうちに「純粹に可能的なもの」(pure possibilities)⁽¹⁰⁰⁾として認識されて存在する。

Ⅶ

しかし、トマスは何故このようなアイデアを措定するのであろうか。それは創造が神の意志を原因としていることに関係する。もし神のうちに、それによって諸事物が何らかの時に造られる現実的に実践的なアイデアのみしか存在しないとすれば、神の思惟内容はこの時間的、歴史的世界のうちに完全にあらわれることになるであろう。しかし、有限な時間的世界が神の無限の思惟内容⁽¹⁰¹⁾を完全に反映し尽すことはありえない。「無」から創造された世界は端的に有限であり、それ故この時間的世界にあらわれない神の思惟内容が、この世界のうちに表現される思惟内容よりはるかに豊かに、無限であるといわなければならない。神のうちに無限の思惟内容、無限のアイデアが措定され、その無限のアイデアのうちの極く限られたアイデアによって世界は創造されたと考えなければならない。無限のアイデアの中からそれによって世界を創造するアイデアの選びは神の意志の全き自由⁽¹⁰²⁾に属する。各々のアイデアのうちに表現されている諸事物は存在することも存在しないことも可能な徹底的に偶然的な存在(ens contingens)として認識されており、従ってかかる諸事物が存在すること自体、並びにこれら諸事物のうちのいかなる事物が存在するかということは全く神の意志の自由に属する。それ故、世界を創造する原因としてのアイデアは最後的には神の意志に結合され、神の意志によって存在へと限定されたアイデアである。そのことは同時に神の意志によって存在へと限定されないアイデア(ideae indeterminatae)を神のうちに無限に措定

することを意味する。⁽¹⁰³⁾ これらイデアのうちに認識される「純粹に可能的なもの」を神は自らが造り出しうるものである限りにおいて自己の全能の能力(potentia)のうちに、またそれらが自己の本質の善性を分有しうるものである限りにおいて、自己の無限の善性(bonitas)⁽¹⁰⁴⁾のうちに永遠に眺めているのである。

註

- (1) トマスは神の三つのPersona, 即ちPater, Filius, Spiritus Sanctusの三位一体を神の自己自身の内におけるprocessioによってmanifestareしようとしている(Sum, Theol. I, Q. 27以下)。また世界の創造を、神からの被造物のprocessioとして規定している(idid. I. Q. 44以下)。
- (2) Verbumのprocessioについて。Sum. Theol. I, Q. 27, a. 1, ad2“…… id quod procedit ad intra processu intelligibili, non oportet esse divevsum. …… unde cum divinum intelligere sit in fine perfectionis, …… necesse est quod verbum divinum sit perfecte unum eo a quo procedit, absque omni diversitate.” ibid. a. 2. c. “unde processio verbi in divinis dicitur generatio, et ipsum verbum procedens dicitur Filius.” Amorのprocessioについて。ibid. a. 3. c. “……in divinis sunt duae processiones, scilicet processio verbi ; et quaedam alia. ……unde et praeter processionem verbi, ponitur alia processio in divinis, quae est processio amoris.” ibid. a. 4. c. “Et ideo quod procedit in divinis per modum amoris, non procedit ut genitum velut filius, sed magis procedit ut spiritus.”
- (3) ibid. Q. 44. introd. “Post considerationem divinarum Personarum, con-

siderandum restat de processione creaturarum a Deo.”

- (4) *ibid.* Q.3. a. 4, c. “Cum igitur in Deo nihil sit potentiale, …sequitur quod non sit aliud in eo essentia quam suum esse. Sua igitur essentia est suum esse.”
- (5) *ibid.* Q.4., a. 2. c. “Cum Deus sit ipsum esse subsistens, nihil de perfectione essendi potest ei de esse.”
- (6) *ibid.* Q.3. a. 4, c. “Secundo, quia esse est actualitas omnis formae vel naturae : ……Oportet igitur quod ipsum esse comparetur ad essentiam quae est aliud ab ipso, sicut actus ad potentiam.”
- (7) *ibid.* a. 2, c. “Ostensum est autem quod Deus est purus actus, non habens aliquid de potentialitate.”
- (8) *ibid.* Q.4, a. 1, c. “Secundum hoc enim dicitur aliquid esse perfectum, secundum quod est actu.”
- (9) *ibid.* a. 2, c. “Omnium autem perfectiones pertinent ad perfectionem essendi.”
- (10) *ibid.* “unde sequitur quod nullius rei perfectio Deo desit.”
- (11) *ibid.* Q.25. a. 1, c. “Manifestum est enim quod unumquodque, secundum quod est actu et perfectum, secundum hoc est principium activum alicuius.”
- (12) *ibid.* ad 1. “potentia activa non dividitur contra actum, sed fundatur in eo : nam unumquodque agit secundum quod est actu.”
- (13) *De Pot.* Q.2, a. 1, c. “agere vero nihil aliud est quam communicare illud per quod agens est actu, secundum quod est possibile.”
- (14) *Sum. Theol.* I, Q.25, a. 1, c. “Ostensum est autem supra quod Deus est purus actus, et simpliciter ei universaliter perfectus; neque in eo aliqua imperfectio locum habet. Unde sibi maxime competit esse principium activum.”

- (15) De Pot. Q.2, a. 1, c. トマスは神を *actus purus* と規定することによって、神の内なる *Persona* の *processio* 即ち *Deitas* の *communicatio* が人間の *ratio naturalis* によって *intelligere* されると言っているのではなく、*fides catholica* によって措定されることを述べている。
- (16) Sum. Theol. I, Q.27, a. 3, c. “……Huiusmodi autem actio in intellectuali natura est actio intellectus et actio voluntatis.”
- (17) *ibid.* a. 1. et a. 4
- (18) *ibid.* a. 2, ad2, “Sed intelligere divinum est ipsa substantia intelligentis, …… unde verbum procedens procedit ut eiusdem naturae subsistens.”
- (19) *ibid.* Q. 33. a. 1 ad2.
- (20) *ibid.* ad 1.
- (21) *ibid.* ad 2.
- (22) *ibid.* Q. 27, a. 2, c.
- (23) *ibid.* a. 4, ad 3.
- (24) *ibid.* Q. 19, a. 4, c. “Non igitur (Deus) agit per necessitatem naturae; sed effectus determinati ab infinita ipsius perfectione procedunt, secundum determinationem voluntatis et intellectus ipsius.”
- (25) *ibid.* Q. 14, a. 8, c. et Q. 19, a. 4, c.
- (26) *ibid.* Q. 45, a. 6. c. “Unde et Deus Pater operatus est creaturam per suum Verbum, quod est Filius; et per suum Amorem qui est Spiritus Sanctus. Et secundum hoc processiones Personarum sunt rationes productionis creaturarum, in quantum includunt essentialia attributa, quae sunt scientia et voluntas.”
- (27) *ibid.* “Et ideo creare convenit Deo secundum suum esse: quod est eius essentia, quae est communis tribus Personis. Unde creare non est proprium alicui Personae, sed commune toti Trinitati.”
- (28) cf. De Verit. Q. 4. “De Verbo”

- (29) De Veirt. Q.2. a. 5, c. "Scientia divina, quam de rebus habet, comparatur scientiae artificis, eo quod est causa omnium rerum, sicut ars artificiatorum." cf. Sum. Theol. I. Q. 14, a. 8, c.
- (30) De Verit. ibid. "Artifex secundum hoc cognoscit artificiatum per formam artis quam habet apud se secundum quod ipsam producit."
- (31) ibid. Q.3. a. 1, c. "forma exemplaris, ad cuius similitudinem aliquid constituitur et in hac significatione consuetum est nomen ideae accipi, ut idem sit idea quod forma quam aliquid imitatur."
- (32) ibid. Q. 2, a. 5, c. "Artifex autem non producit artificiatum nisi secundum formam, quia materiam natura praeparavit ;et ideo artifex per artem suam non cognoscit artificiatum nisi ratione formae."
- (33) cf. De Verit. Q.3, a. 1, c.
- (34) De Verit. Q. 3, a. 1, ad 5 "ideae existentes in mente divinasunt creativae et productivae rerum."
- (35) Sum. Theol. I. Q.45, a. 1, c. ".....ita creatio, quae est emanatio totius esse, est ex non ente quod est nihil."
- (36) De Veirt. Q. 3, a. 1, c.
- (37) Sum. Theol. I. Q. 15, a. 1, c.
- (38) ギリシャ語の"idea"はラテン語において"species"あるいは"forma"と言われる。しかし、すべての forma が idea であるわけではない。ideaとしての forma の特徴をトマスは De Ve. it. Q. 3, a. 1, c. において詳論している。以下要約。

I) idea の第一の特徴。

「或るもの」の「形相」(forma aliarum rei) は三様に語られる。

1° "forma a qua formatur aliquid" たとえば、agensの formaによって effectusが formareされる。しかし、agensの forma はideaではない。

2° "forma alicuius secundum quam aliquid formatur." たとえば、ani-

maがhomoのformaであり、statuaのfiguraがcuprumのformaである。compositumの部分であるformaは真にそのもののformaであるが、しかし、そのもののideaとは言われない。けだしideaは、forma separata ab eo cuius est forma を表示する名称だからである。

3° “dicitur forma alicuius illud ad quod aliquid formatur.” “forma ad cuius similitudinem aliquid constituitur.” “forma quam aliquid imitatur.” このformaがforma exemplarisと言われ、ideaはこの意味でのformaである。それ故、アイデアを規定する第一点は「或るものがそれを模倣する形相」と特徴づけられる。

II) idea の第二の特徴。

ideaあるいはforma exemplarisは「或るものがそれを模倣する形相」と規定されるが、その模倣の仕方が二様に考えられる。それ故、模倣されるformaのすべてがideaであるわけではない。

- 1° agensのintentioによって或るものが或るformaを模倣する場合。
- 2° 或る場合には、模倣がagensのintentioを越えて、per accidensに、且つ偶然に起こる。formaを偶然から模倣するものは「その形相へと」(ad illam formam) 形相化されるとは言われない。けだし“ad”は「目的への秩序」(ordo ad finem) を含意する。

imitatioの仕方が“ad”という仕方でのそれと、“ad”を含まないそれに区別され、或るものが“ad”という仕方ではper seに且つagensのintentioによって模倣するformaがideaである。

III) idea の第三の特徴

“agere propter finem”が二様に考えられる。1)agensが目的を自己に決定する場合。これは知性によってはたらくすべてのagensに妥当する。

2) 或るagensはその目的がagens principaleによって決定される。

従って、目的を自己に決定しないagensによって、或るものの模倣が行なわれるとき、模倣されるformaはideaではない。たとえば、産む人間のfo-

rmaは産まれた人間の idea あるいは exemplar ではない。これは人間の natura の operatio である。目的のためにはたらく agens が目的を自己自身に決定するときに模倣される forma が idea と言われる。それ故 idea は最後の次に次の如く規定される。

「idea は目的を自己自身に決定する agens の intentio によって或るものが模倣する形相である」と。

- (39) De Verit. Q.3, a.1, c. "ideo non possumus ponere ideas esse extra Deum, sed in mente divina tantum."
- (40) Sum. Theol. I. Q.2, a. 3, c.
- (41) ibid.
- (42) De Verit. Q.3, a.2, c.
- (43) Sum. Theol. I. Q.14, a. 2, c. cf. Q.85, a.2.
- (44) ibid. Q.12, a.2. c. cf. De Verit. Q.2. a.5. c. et. ad7.
- (45) De Verit. Q.2. a.3. ad1.
- (46) ibid. Q.3. a.1. ad2. "ad speciem quae est medium cognoscendi requiruntur duo scilicet repraesentatio rei cognitae, quae competit ei secundum propinquitatem ad cognoscibile; et esse spirituale, vel immateriale quod ei competit secundum quod habet esse in cognoscente."
- (47) Sum, Theol. I. Q.14, a. 1, c. "Patet igitur quod immaterialitas alicuius rei est ratio quod sit cognoscitiva."
- (48) 註(46)参照。
- (49) De Verit. Q.2, a.3, ad9. "similitudo aliquorum duorum ad invicem potest dupliciter attendi. Uno modo secundum convenientiam in ipsa natura et talis similitudo non requiritur inter cognoscentis et cognitum."
- (50) ibid. "…… Alio modo quantum ad repraesentationem; et haec similitudo requiritur cognoscentis ad cognitum."
- (51) De Verit. Q.3, a.2, c. "Alio modo ita quod (forma) sit terminus

actus intelligendi, sicut artifex intelligendo excogitat formam domus ; et cum illa forma sit excogitata per actum intelligendi :et quasi per actum effecta, ; sed magis se habet ut intellectum.”

- (52) Sum. Theol. I.Q.14, a. 2, c. “tamen in operationibus quae sunt in operante, obiectum quod significatur ut terminus operationis, est in ipso operante ; et secundum quod est in eo, sic est operatio in actu.”
- (53) *ibid.* a. 5. ad 3.
- (54) *ibid.* a. 2 ad 3. “Deus autem est sicut actus purus tam in ordine existentium, quam in ordine intelligibilium.”
- (55) *ibid.* ad 2.
- (56) *ibid.* corp. “Sed ipsa species intelligibilis est ipse intellectus divinus.”
- (57) *ibid.* a. 4. c. “Unde, cum ipsa sua essentia sit etiam species intelligibilis.”
- (58) *ibid.* a. 2, ad 2. “Sed intellectus divinus.....est sua perfectio et suum intelligibile.”
- (59) *ibid.* a. 4. c. “Et sic patet ex omnibus praemissis quod in Deo intellectus, et id quod intelligitur, et species intelligibilis, et ipsum intelligere, sunt omnino unum et idem.”
- (60) De Verit. Q. 3, a. 2, c.
- (61) *ibid.*
- (62) *ibid.* ad 9.
- (63) *ibid.* corp. “et ideo ipsa divina essentia, cointellectis diversis proportionibus rerum ad eam, est idea uniuscuiusque rei.” cf. Sum. Theol. I.Q.15. a. 2.
- (64) *ibid.* ad 5. “forma quae est in intellectu, habet respectum duplicem : unum ad rem cuius est, alium ad id in quo est. Ex primo autem respectu non dicitur aliqualis, sed alicuius tantum.Sed secundum alium

respectum aliqualis dicitur, quia sequitur modus eius in quo est. ”

(65) *ibid.* Q.2, a. 5, ad17.

(66) *ibid.* Q.3, a. 5, ad2. “ideam et ideatum non oportet esse similia secundum conformitatem naturae, sed secundum repraesentationem tantum.”

(67) *ibid.* Q.2, a. 10, ad1. “rationes quae sunt in mente divina, non producunt se in creatura secundum modum quo sunt in Deo, sed secundum modum quem patitur ratio creaturae.”

(68) 註 (64)参照。

(69) 註 (67)参照。

(70) *De Verit.* Q.3. a. 2, ad5. “non enim materialium est forma materialis, nec sensibilibus sensibilis.”

(71) *ibid.* a. 5, ad2. “Unde et rerum compositarum est simplex idea ; et similiter existentis in potentia est idealis similitudo etiam in actu.”

(72) 註(70)参照。

(73) 註(70)参照。

(74) *cf.* *De Verit.* Q.2. a. 8. ad3.

(75) *cf.* *ibid.* a. 13, ad 1.

(76) *cf.* *ibid.* a. 12, ad3.

(77) 註(70)参照。

(78) 註(71)参照。

(79) 註(70)参照。

(80) 註(71)参照。

(81) 註(74)参照。

(82) 註(75)参照。

(83) 註(76)参照。

(84) *De Verit.* Q.3, a. 7.

(85) *ibid.* a. 5.

- (86) *ibid.* a. 8.
- (87) *ibid.* a. 5, ad 1. "quamvis materia sit informis tamen inest et imitatio primae formae : quantumcumque enim debile esse habeat. illud tamen est imitatio primi entis ; et secundum hoc potest habere similitudinem in Deo. "
- (88) *ibid.* a. 8, c. "singularitatis autem principium est materia. "
- (89) *ibid.* Q. 2, a. 5, c. "Omnis autem forma de se universalis est. "
- (90) *ibid.* ad 14. "quamvis *singulare*, in quantum huiusmodi, non possit a materia separari, tamen potest cognosci per similitudinem a materia separata, quae est materiae similitudo ; sic enim, etsi sit separata a materia secundum esse, non tamen est separata secundum representationem. "
- (91) *ibid.* Q. 3, a. 3. c.
- (92) *ibid.* a. 5, c.
- (93) *ibid.*
- (94) *ibid.* a. 8, c. "Ponimus etiam, quod per divinam providentiam definiuntur omnia singularia. "
- (95) *ibid.* a. 3, c.
- (96) *ibid.* sed contra ad 1.
- (97) *ibid.* a. 6, c.
- (98) *ibid.* a. 2, a. 8, c.
- (99) *Sum. Theol.* I. Q. 45, a. 1, c. "Idem autem est nihil quod nullum ens. "
- (100) *De Verit.* Q. 2, a. 8, c.
- (101) *ibid.* a. 9, c. "unde concedo simpliciter quod Deus cognoscit actu infinita absolute,"
- (102) *ibid.* Q. 3. a. 6. c. "quia ad ea quae sunt vel erunt vel fuerunt, producenda determinatur ex proposito divinae voluntatis. "

(103) *ibid.* “……non autem ad ea quae nec sunt nec erunt nec fuerunt,
et sic huiusmodi habent quodam modo indeterminatas ideas.”

(104) *ibid.* Q. 2, a. 8, c.